



IMMORTAL

其れは誰にも知られぬ青い海の底での出来事。

半分欠けた月に照らされた、夜空と同じに漆黒の海原。

一人の人魚は、気がつけば海原をただ一人、彷徨っていた。

家族もいない。仲間もいない。

幼い人魚は、波に体を任せて漂っていた。

何があったのかも分からない。ずっと西、彼女が漂ってきた方向からは、濃い血の匂いが漂っている。

複数の人数の血の匂いが入り混じるそれは、かつては彼女の仲間であった人魚の中を駆け巡っていたものである。

嵐もなかった。サメにも出会わなかった。

だが、そこは人里に近い場所である事は確かだった。

何があったのかも分からぬまま、彼女は岩陰に隠れ、魚を食料とし、生きていた。

しかし、其の場所はあまり港町から離れていないこともあり、彼女はよく人里近くの岩場に姿を現した。

人が、恋しかった。仲間にあつた事のない彼女は、そうしてずっと、大人になっても人里に姿を現しては高い声で寂しげに鳴いた。

半分闇にくわれた月の元、姿を現す人魚は噂となる。

其れは誰とも知れぬ物語。

病で家族を、仲間を、故郷をも失い、ひたすらに死を恐れ、不死を求める青年の話。

小さな村は、十分な薬がなかった。

けして裕福とはいえない小さな村は、それでも皆幸せに暮らしていた。

なのに。其れを、伝染性の病が奪った。

村は屍があふれかえり、かつては人々が耕していた畑は荒れ果て、犬一匹近寄らぬ廃村と化していた。

十分な薬も、食料もなくなった村人達は、なす術もなく、死の波に呑み込まれていったのだ。国の使いが事を知り、駆けつけた時、すでに村人達はほぼ息たえ、異臭を放っていた。

全ては遅いと思われた。人一人、もう生きているものはいないと。

けれど、死のふちにいながらも、いまだ命の尽きていない者がいた。

病と飢えでやせ細った、十五になったばかりの少年だった。

彼は保護され、遠い親戚の下へ引き取られる。けれど病の治った今も、彼は死を酷く恐れていた。

目の前で息絶えた家族と仲間たち。やがて自分も迎えるであろう死を待つ時の孤独と例えようのない恐怖、苦痛。

其れが幾度も悪夢として蘇る。

病に蝕まれ、皮膚は所々変色する。どうしようもない喉の渇き。異常なほど体の熱さは、我が身を芯から地獄の業火で焼き尽くす様。

其の病に、村人は、仲間は、家族は、蝕まれた。

母はまだ幼い弟の病を治すため、懸命に看病を続け、そして母も病に冒された。

弟は熱いと何度も呟きながら、青年の見守る前で息絶え、母は其の翌日眠るように死んだ。

父は村の大人達と共に薬をもらいに、遠い町まで行ったが、途中で野犬に食い殺された。

そうして自分も病にかかり、死の淵を彷徨う――。

そして目が覚める。

怖いと、毎晩泣き叫んでは、其の家の主、つまり彼を引き取った親戚に怒られた。

其の家の者は少年を歓迎しなかった。故に辛くあたり、部屋を皆のところから遠ざける。一度病にかかった者だから。

故に少年は、十七になった今も、孤独を抱えている。そして、死への恐怖を強く持っている。

ある時、青年は不死になれるという話を聞く。

其れは信憑性のない、童話のような話であった。

それでも、青年は其の話を夢中になって聞いた。彼が十八の歳になったばかりであった。

この世界に存在する、数少ない種族、人魚。

澄んだ海にしか住まぬという人魚。下半身は大きな、魚のような鱗を持っていて、上半身は美しい人の姿だという。

其の人魚は天からの加護を受けていて、其の人魚の血をすすれば何の病でも治り、肉を食らえば若さを取り戻す事ができる。

そして心臓を食らえば、体の変化に絶えられず自滅し、発狂するか、或いは――...体が変化に絶えられるならば、...不死になれるという。

確かに昔、人魚はいた。数多く。けれど、それらは全て人が血肉を『薬』として使うため、捕りつくしたと、いつしか母から聞いた。

其れが嘘か真かは知らない。

けれど、けれど。もしも其れが本当であれば？心臓は手に入らなくとも、血さえ手に入れば...、昔のようなことにはならないかもしれない。

其の人魚の血を、肉を、心臓を手に入れることが出来たなら。

毎日のように悪夢にうなされ、この家にも受け入れられず、死と病に毎日恐怖を抱く事もなく

なるだろうか。

其れを幾度も考え、話を聞いたたび、不死を求める考えは強くなっていった。

そして厚い雲が月を覆い隠したある日の事、青年はわずかな荷物とあるだけの金を手にし、其の家を抜け出した。

当てはない。

ただ噂に聞く、港町を目指そう。其れはここから遠く離れていたが、それでもいけない場所ではなかった。

青年は船を乗り継ぎ、歩き、金がなくなれば働き、時には盗みをし、その町を目指す。けして楽な旅ではなかった。盗賊に襲われたこともあった。其の度に、彼は全力で逃げ回る。逃げ切れずに捕まった事もある。其の時は恥をしのいで、命乞いをした。

当然野犬にも襲われた。しかし、父のようにはなるまいと、必至に松明を使って追い払った。

崖から誤って落ちたこともある。病にかかり、倒れ、昏睡状態に陥った事もある。其の時も、父から教わった手当ての仕方自力で立ち直り、運がよければ通りがかりの商人に助けてもらう。

生きた方が勝ちなのだ。そう言い聞かせて、病に臥せていても、命に関わる怪我をしても、涙と恐怖をこらえていた。

そうした避け難い恐ろしい経験をする度、更に不死を求める心は強く、強くなる。もう後戻りは出来ないと、決心して後ろを振り返らずに進んでいった。

そうして、彼は金を稼ぎ、噂を集めつつ、町へと町を、移動した。

時間は過ぎ、家を出た冷たい雪の残るあの日から、三回の季節が過ぎた。

もうすぐあの季節に戻る。冷たい風が吹いている。しかし青年は、家を出た日とは比べものにならないくらい、精神的にも肉体的にも強く大人になっていた。

けれど、病への、死への恐怖は未だ大きい。むしろ、更に大きくなっている。何も出来ずに死んでいった家族を想う度、生きようとも思う。

家族のためとは言わない。あのような無惨な、そして無様な死に方はしたくない。もう、病の苦痛を味わうのは嫌だった。

そんな頃に、やっと、目指していた街へとたどり着く。

確かに人の多い港町で、貿易船が盛んに行き来を繰り返していた。多くの店が市場に、大通りにも並び、新鮮で珍しい魚や果実類を安く売っている。

今は失き故郷とは比べ物にならないほどの、裕福で安泰した街。ここならば、病にかかったとしても薬には困らないだろうか。

ざわざわと人の声と馬車の音とが響く街の中、彼は薬屋の、薬瓶を手に目を細めた。すでに人の声は彼の耳に入っていない。

人魚を。薬を。不死の薬を、探さねばならない。

立ち寄った薬屋には、店内を囲む棚に見た事のない薬が沢山置かれていた。その薬屋は街でも一番の薬の量と知識、質を誇る。其れ故に希少な薬がずらりと並べられ、青年は驚きと、好奇心とでそれらを飽きずに見て回った。

薬草、煎剤、塗薬、この地域では見られない漢方薬。数え切れない程の薬達。けれど、当たり前というべきか、人魚に関する薬達は見当たらなかった。

青年は聞く。年老いた店主に、捜し求めているものを。人魚の血肉、心臓、そしていつしかに聞いた、生きた人魚の事を。

軽くあしらわれるかとも思った。けれどその店主は、しわがれた声で相槌を打ち、そして口を開いた。

其れは、その七十にもなった店主が、まだ薬師になったばかりの話。五十年ほど前の話である。

当時、この海辺の岩陰に、人魚の群れが好んで姿を現した。それらは半月の夜に決まって現れ、岩場に寄りかかりながら高い声で歌った。其の声は様々な人魚の声と、波の音とが混ざり、潮風に乗って街にもかすかに届くほど、よく通り、水の流れのように美しい歌声であった。

人魚という種族は、女しかいない。子を成すには、人間を誘惑し、海に引きずりこみ、そして交配する。引きずりこまれた男は、用が済めば人魚に食われる末路をたどる。

其の交配のために、人魚達は歌を歌い、人を誘うため、人里近くに姿を現したという。

丁度其の頃、人魚の血肉についての噂が広がり、聞けば裏では人魚の血肉が薬として、高値で取引されていた。其れは事実である。

人魚は世界でも珍しく、人前には殆ど姿を現さない。だから、採られる『薬』の量も少なかった。そこでこの街に姿を現す人魚の群れに目をつけた者がいた。

其れは闇取引で、人魚の血肉を仕入れ、高値で売り払う、密猟者達。何も人魚の血肉を狙っているのは一人だけではない。

治る確率の低い病にかかり、藁にもすがる思いで人魚の血肉を手に入れようとする、貴族たちもそうであった。

そうして、彼女達は狩られる。半月の晩、いつものように姿を現し、歌い始めた彼女達を網にかけ、逃げ出そうとする者を銚で突き、息の根を止め、それらを薬として売った。

彼女達の狩られた日、海には人魚の血が漂い、赤く染めたという。

人間の手によって狩られた人魚は、大半が捕まり、後の生き残った人魚たちは、それきり姿を現さなくなった。恐らくは怪我によって途中で力尽きたか、別の土地へと逃げ出したか。

ここ数十年、そうして人魚は表さなくなったはずであった。けれど、数年前に突如人魚が現れた。

彼女は前の人魚のように歌わない。あの岩場から街を見つめ、一人で悲しげに鳴いている。

姿を現すのは交配のためでない事は、分かっている。歌わない事と、数年通してずっとここに居る事。新しくやってきた人魚か、或いは...、狩られた人魚達の生き残りか。なんにせよ、其れが青年の探している、噂になっている人魚であると。

そう、薬屋の店主は話してくれた。

人魚の血肉の効果については、よくは分からないという。けれど、街の者が、治る見込みの無いといわれた患者が人魚の血肉によって救われたと、噂をしているのを何度か聞いた事はある。

薬屋にとって夢見事のような信憑性の無いものを信ずることも無いが、人魚狩りの事は、今でも覚えている。

店主は一通りの事を話し終わると、港の方を指差した。それは港から少し離れた、海に面する小さな洞窟をさしている事が、分かった。

道のない岩場。洞窟の中には海水が入り込んでいるらしい。そこへ行くためには人は泳ぐか、小さな船を使って渡るかしなければならないだろう。

其の洞窟の手前、大きな岩がひとつあった。

其の岩に、半月の夜、人魚が現れると。

彼はその岩場の一番良く見える宿に、泊り込む事に決めた。

いつ、人魚に出会えるかは分からない。

運がよければ数日後、悪ければ数年かかるかも知れない。それは天候と、運と、人魚次第である。

どちらにせよ、人魚の心臓、血肉を手に入れるのは恐らくは長くかかるだろう。

宿に泊り込むついで、ここで暫く働かせてくれと、宿の主人に交渉した。宿の主人は人手が足りなかったこともあり、快く承諾してくれた。

そうして働き、金を得、客や町の皆から人魚の情報を集めた。

半月。

天気が良かった。黒ずんだ空を、世界を、僅かな雲から覗く月が、あたりを照らし出している。満月の時のようなまぶしさはなく、半月の淡い明かりは、どこか落ち着くものがあつた。

彼は宿を抜け出した。

宿で働き、五ヶ月が過ぎる。それまで、天気が悪かったり、急な用事が入ったりと、何かと半月の日に外に赴く事はできなかった。できたとしても、やはり人魚には会えずじまいであった。

けれど今回は、前もって休みを取り、こうして目的の場所へたどり着く事ができた。

天気はいい。半月の明かりが肌に当たるのを感じる。雲が所々と有り、流れていく。けれど岩場には、今は誰もいなかった。

ぬれることなどかまわない。小船がなくても泳いでいく。手には短剣をもち、彼は人魚が現れるのを浜辺で、待った。

ただこの所、天候のせいがあり、人魚が現れる事が少なくなったと聞いた。確かに仕事の合間に、耳を澄ませてベランダに少し出たりはしたが、人魚の鳴き声は聞いていない。

現れるか否かー…。

青年は漆黒と、月光の光とのコントラストの半分だけの月と、岩場とを眺めていた。

さざ波の音が耳を突く。潮の香りが鼻をくすぐる。少し湿った冷たい風が、肌を撫ぜる。満月よりも少ない月明かりが、体を包み込む。

少し、頬がぬれている。そして浜辺の細かい砂がその頬にまとわり付く。

眠りを月明かりとさざなみと、冷たい風に妨げられ、彼は身を起こした。

いつの間にか眠っていた。

いつ、眠りに誘われたのかは覚えていなかった。頬と、腕に付いた砂を気にも留めず、彼は辺りを見回す。

目の前は、変わらず漆黒の空に浮かぶ欠けた月と、その光を受けて押しは引き、を繰り返す波。視線を左にずらせば、崖が見えた。そのそばには岩場があり、絶壁にぽっかり空いた洞窟がある。

。

周りには自分以外の人はいなかった。堤防を上がった少し先に民家や店が並んでいるが、夜遅くであるせいか、やはり人の気配はなかった。

漁船もこちらの港には泊まる事がないために、視界を遮る物もない。

彼は少しぼやけた視界と睡魔を振り払うかのように、首を振った。

何時だろうか。月は、すでに月の落ちる方向へと傾いている。二時、三時、草木も眠る時刻だろうか。

民家の明かりは消え、人はいない。妙に静かなこの浜辺で、青年はぼんやりと月を眺めていた。

ふと、規則正しく流れる波の音に混じり、小さな高い音が聞こえた。

否、音というよりは、鳴き声に近かった。

青年は慌てて起き上がり、岩場を見つめた。まだあまり目が暗闇になれていないせいか、よくは分からなかった。が、確かに何かがある事には分かった。

キュウ…ン

小さな声がそこから発せられる。少し寂しげに聞こえるそれは、子犬がなくよりも高い声である。例えるならば、イルカの声、とでも言うべきか。

段々と目が慣れてくる。その岩場に寄りかかるようにしてこちらを見つめる者がいる。

人の姿をし、ゆれる波間から、僅かにひれのようなものが見えた。

青年は暫く見入っていた。これが夢か現かさえもわからない。まだ、夢の中にいるのかもしれ

ない。

目の前には、探し求めていた人魚がいる。

彼女は月を背にし、岩場に寄りかかり、こちらをじっと見つめていた。

確かに美しい女性の姿をしていた。長い髪は体に張り付き、彼女が動くたびに水をはじいてゆれた。漆黒の中では、黒髪にしか見えなかった。

音を立てて黒い波がゆれる。月明かりを反射し、その波は彼女の体にまとわり付く。

その波に引きずられるように彼女は水中へともぐっていった。

魚のような、それでいて巨大な青い尾ひれが、水を、空を打った。確かに噂に聞くとおり、下半身は魚であった。

彼女は浅い位置でぐるりと旋回し、そしてまた戻っていく。口には、暴れまわる両掌ほどの大きさの魚を一匹啜っていた。

人魚がいる。生きている。

その血が、肉が、心臓が、自分の求めていたものである。

波音が響く。彼女は白目のない、黒い瞳でこちらを見据えている。耳はなく、代わりにえらのようなものが生えている。

肌は漆黒の中、殆ど灰色に近かった。けれどそれは人と同じ肌の色でなく、青色なのだと思いついたのは、月明かりに照らされ、僅かにその色がうかがえたからであった。

彼は、そこへとたどり着くべく、足を海水に浸した。

人魚までの距離は、十メートルはあった。段々と深くなっていく海の中、人魚まで後数メートルという所で歩みをとめた。

彼女は魚を啜えたまま、こちらをうかがっている。

青年は腰まで海に使ったまま、その人魚に見入っている。

啜えた魚は動かなくなった。彼女の牙が、魚の息の根を止めた。

彼女は動かなくなった魚の頭を、片手でもぎ取った。黒い液体が彼女の手伝った。

その手は、鋭い爪が生えている。細い女の指と指の間には、水かきが付いている。明らかに人の手ではない。

彼女は魚の頭を岩場に置き、啜った魚の半身を、飲み込もうとしている。

姿は女の姿でも、確かにその行動は獣そのものである。

口を大きく開け、鳥が魚を飲み込むように、それを喉に押し込んでいく。やがて魚の尾ひれも見えなくなり、彼女は魚を食い尽くした。そして彼女はまた海へともぐる。

人魚は獰猛だと、この街に着いたばかりの時に、薬屋の店主から聞いた。

女の姿をしていても、その本能は獣と変わらず、襲いかかってくる。人の肉さえも好んで食う事から、人魚に近づく事は危険とされ、街の者は殆どが近寄らずにいた。

それらの事が脳裏をよぎった。けれど、それはすぐに打ち消される。人魚を、心臓を、手に入れなければならない。

それだけを胸に、腰にさしておいた短剣を引き抜いた。後ろで短剣を隠し、再度人魚が現れ

るのを待つ。

けれど、人魚は現れない。

青年は人魚の姿を探す。そして暫くして、間近の水面下に、何かがよぎるのを感じた。

次の瞬間、彼は海の中に引きずり込まれていた。

足を滑らせた？そんなはずはない。明らかに、何かに引っ張られ、引きずり込まれたのだ。

もがき、水面へと手を伸ばそうとしながら、それでも彼は足に絡みつく何かを見つめた。

それは、確かに先ほどまで泳いでいた人魚であった。

腕はしっかりと青年の足首からひざまでに絡みつき、指はその服を、離すまいとつかんでいる。

長い爪は、厚手のズボンをつきやぶり、青年の大腿に食い込んでいる。

痛みを感じる暇などなかった。もがけばもがくほど、酸素を吐き出し、水を飲み込んでしまう。

殺される。このままでは、殺される。

一瞬、脳裏に家族や仲間の死に顔がよぎる。

苦痛の中で死んでいく、いつかの仲間たちの死に際の光景。自分もそうなるのは、嫌だった。

ここで死ねない。むしろ、生きるために、病など、死など知らない肉体になるために、この人魚に近づいたのではなかったか。

人魚を見つめた。青年は何とか握り締めていたナイフで、その人魚を傷つけようと、人魚の片腕を、精一杯腕を伸ばし、力を込めてつかむ。

傷つけ、逃げられればそれでいい。もしも致命傷になるような傷を負わせたなら、この場でその心臓を抉り出しても良い。

意を決し、その人魚めがけ、ナイフを振りかざし...そして。

しかし、ナイフを振りかざそうとしたとき、一瞬うかがえたその無垢な青い瞳に、青年は思わず行動を止めた。

自分を薬にするために殺しに来た青年を怖がることもなく、そして先ほどまで採っていた魚のように青年を食らおうという気配もない。

むしろじゃれ付く子犬のように、興味を持ってその青年を水中に引き込んだといった気がした。

———無垢な瞳は、何も知らないのだろうか。

自分の仲間はこの青年と同じ、人間たちに殺され、薬にされ、売られていたことを。

彼女は、目の前にいる自分が、今彼女を殺そうとしたことに、気づかなかっただろうか。

人魚は、自分の腕をつかんだ青年の腕を、じゃれるように軽く口付けた。

青年はそのじゃれた口付に、一瞬薬屋の言葉を思い出し、慌てて人魚から手を離した。

彼女はもしかしたら本当に自分を仲間と思ってじゃれているのかもしれない。だからといって、自分が殺されないという保証はない。

随分と酸素を吐き出し、水を飲んだおかげで、意識は朦朧としていた。

水面を見上げる。

水底から見えるその月を、つかもうとするように手をのばす。

水の中から見える半分だけの月は、ゆらゆらとゆれていた。

意識を失ったのだろうか。

青年は、深い意識の中で、思い出す。

今はもう地図にさえも乗っていない村のこと、豊かではなかったが、それでも助け合って生きていた村人たち。

同い年の友人と野を駆け回り、時にいたずらをして両親に咎められた。

弟は自分を慕い、いつでもくっついて歩いていた。

それは遠い昔のことのよう思えた。

そして不意に場面は切り替わる。

あの、地獄のような光景が目の前に広がった。

村の地面には行き倒れた人々が死体となって転がり、その中には野を駆け回った友人と、その家族もいた。

薬は十分なほどはなかったと知る。

家の中には、眠る弟。しかしそれは、眠っているのではなく、冷たかった。

恐ろしい。

苦しい。

いや、もうこんなことは過ぎたはず。

これは、夢なのだ...夢なのだ。

目を覚ました。

ぼんやりとした意識。少し胸が苦しく感じて、ふと思い出した。

人魚に水中に引きずり込まれ、逃れることが出来なかったこと。

ではここはどこだろう。

霞がかかった視界は数回冷たい手のひらでこすると、少しは晴れた。

それは暗く、ごつごつした岩に囲まれた所...、つまりは洞窟であった。背には確かに岩の感触がする。とがった石が所々突き出ているため、少し痛かった。

体を起こし、辺りを見回す。海水の入り込んだ洞窟。すぐそばには、入り込んだ海水が満ち引きを繰り返している。

その海水の入り込む場所は、すぼまったこの洞窟への入り口。そこからはわずかに月明かりが入り込んでいた。

青年は自分の体を調べてく。やはり体は海水まみれでべとついている。

口の中にはいまだ海水の味が広がっていた。

体には、所々かすり傷があった。おそらくここにたどり着くか、つれてこられた際についたものだろう。そして人魚の鋭いつめによる傷である。

しかし、一人旅で鍛えられた体にとって、どれも死ぬほどの怪我ではない。

持っていた短剣はどうしただろう。

しかし、それはどこを探しても、見つからなかった。おそらくは意識を失ったときに、海のそこ
にでも落としたのだろう。

彼は舌打ちする。

折角、人魚にあえたのに。短剣がなければ人魚の血肉を取ることは難くなる。

先ほどはためらいはしたが、今度こそしとめなければ。

————無垢な瞳を思い出す。

血肉のために、ここへとやってきたのだ。

————人魚の楽しそうな顔が脳裏をよぎる。

心臓を食らうために、人魚に近づいたのだ。

————獣のように魚を食らう、人魚を見た。

その心臓が...

水音が、思考をさえぎった。

暗く静かな洞窟には、わずかな水音でも十分に響き渡る。

少々寝ぼけ状態の頭に響く水の音に、そちらを振り返った。

その方向には何もいなかったが波紋が広がっていた。そのほの暗い水の底、ゆらりと泳ぐ魚
の姿。それは人魚である。

やがてそれは青年の近くへと近づき、顔を出す。

青年は人魚の届く範囲に近寄らぬようにと注意しながら、その姿を見つめた。

人魚は魚を啜っていた。手のひらほどの魚は、まだ生きている。おそらくはさっきとってきた
のだろう。

それを飲み込むのかと思いきや、その魚を青年に放り投げた。

びちびちと水のない地面ではねる魚。それを見つめると、人魚はまたももぐっていく。

何なのだろう。もしや、これを食えといってるのだろうか。

彼は首をかしげた。人魚のしたいことがつかめない彼は、そのまま暴れる魚を前に、突っ立っ
ている。

そしてまた人魚が顔を出し、同じように魚を放り投げてくる。

うかつに動けばまた引きずり込まれそうな気がして、身動きひとつしない彼と、彼女が放り投
げた魚を、人魚は交互に見つめている。

もう一度もぐると、今度は彼女が啜えた魚を飲み込んだ。

『貴方もその魚を食べたら？』人の言葉を話せれば、こんなことをいってたかもしれない。

とはいえ、生魚は、食べたことがなかった。

びちびちと飛び跳ねる魚を、このまま食せというのは、少々抵抗があった。

何せここでは火も焚けない。ナイフさえ落としてしまった。

しかし、腹がすいてるのも事実であり、とりあえず魚を食うことに決めた。

人魚に警戒を払いながら、彼は投げ出された魚に手を伸ばす。

人魚は、小首をかしげながら、こちらを見やるばかりである。

彼はそばにあったとがった小石で魚を突き刺し、殺し、その腹を切り裂いた。

...不味かった。

生の魚を食したのは初めてで、うろこをはいでただの肉の塊にするのは、苦勞した。まともな調理経験も、ナイフもないのだから。

塩味のついた魚の肉は不味くはないが、手に残るはらわたの生臭い匂いと味が、強烈にいやだった。

こんなものを人魚は食っているのだろうか。しかも、彼女にいたってはまるのみだ。

...信じられない。

彼はふうっとため息をついた。

何だかんだいっても、腹は膨れた。

腹が満たされ、幾分冷静になった彼は、ぼんやりと、そばの水面から顔を出す彼女を、あぐらをかきながら眺めていた。

彼女は、海の中をぐるりと泳ぎまわる。

何度か泳ぐと、彼女はまたも魚を啜え、こちらへと放り投げる。この作業を、彼が魚に手をつけた後も繰り返していた。

おかげで、魚を放り投げられてはそれを彼が海へ戻し、を繰り返している。

人魚は彼を見やる。丸い目は愛らしい所もある。彼女の身長以上をも伸びた髪は、海草のように水の中で揺れた。

青年は少し笑んで、子犬にじゃれる感覚で彼女に手を差し伸べる。

彼女は、首をかしげた後、その手のそばまで近寄った。

青年の手に自分のひれのついた手を乗せて、彼の手のにおいをおいだり、まじまじと見つめたりしている。

青年の顔をうかがうと、彼女は彼の手のひらをぺろりとなめた。

そして、その手をこちらへと引き寄せる。

こちらへおいでと。

青年は其の腕に、引きずられるように再び海の中へと招かれた。

彼女は彼を、彼の胸の辺りまでの深さへつれてくると、腕を離し、彼の周りを旋回する。

やがて近くの岩場に寄りかかると、彼女は歌いだす。

彼女の歌う姿は、初めてだ。この人魚は歌うことはないと聞いた。

かわりに泣くのだと、皆は言っていた。

川のせせらぎのように高い声が周囲の雰囲気包む。

どこかさびしげで、ゆったりとした歌は、確かに魅了されるものがあった。

人魚は歌い、青年を見つめ、目を細めた。

青年はぼんやりとした頭で、それでもこの人魚のことを考えていた。

獣そのものの人魚。其れでも彼女は無垢な魂そのもの。

じゃれ付く姿は子犬のように愛らしい。

けれど

自分はこの人魚の心臓を食らうために

ここまできたのだ。

永遠の命と病の知らぬ体になるために

ここまで。

気がつけば、彼は深い海のそこに沈められていた。

人魚は青年の手をとり、深い口付けを交わす。

人魚が歌を歌うのは

交配のためだと

誰からか聞いた。

そして相手は用が済めば殺されるのだと。

ぼんやりとした頭で、彼は其の人魚の首に手をやる。

この首を絞めて殺そうかと思い、しかし其の考えはすぐに消え去った。

この人魚の瞳はあまりに悲しい。

仲間を人に殺された人魚と、仲間たちを病によってなくした自分とは、あまりに似ていた。

自分もこのような瞳をしているのだろうか。

彼女もこのような思いを...

そこで彼の意識は途切れた。

その年から、人魚は姿を消し、青年も見つかる事はなかった。

町の人々は、人魚を探していたあの青年は人魚に食われ、そして人魚もどこかで死んだのだろうと噂し、海からはなき声も聞こえる事もなくなった。

けれど数年後、人魚は再び街の近くの岩場に、姿を現した。

今度は一人ではない。小さな、おそらくは彼女の子供も一緒だった。
以前のように寂しく泣くこともなく、彼女は小さな子供と共に町の近くの岩場で、暮らしている。

時には二人で心地よさそうに海をたゆたう所も見られた。
小さな人魚のあどけない表情は、どこかあの青年に似ていた。

終

その世界には大きな街が、いくつもあった。そして南の島には離島がひとつ。

文明は、決して巨大とはいえない。

それはどれもこれも似通っているような普通の街で、人々は農業をして暮らしていた。

さて異変はある日、おこる。

それは神々が気まぐれに散らした何かの粉なのかもしれない。それはわからない。

空は突然真っ赤になり、赤い雲が街を覆った。

小さい粉が、ぱらぱら二つの町あたりに注いだ。

ある人は驚き恐怖し、家に隠れ、ある人は興味を持ってその粉に触れた。

そうして三日間続いた粉は、三日過ぎると突然消えた。いままで何も無かったかのようだった。

さて赤い粉を浴びた人間はどうなったか？

黒髪の間人も、栗色の髪の間人も、金の髪の間人も、全て赤い髪になった。

それどころか目の色まで赤くなってしまった。

これは呪いだ、世界がおわるのだと、皆は嘆いた。だが、気付く。

粉を浴びた赤い人間は、強靱な体力と、怪力を得た。

今まで持ち運ぶには十人かかっていた岩が、一人で軽々と、遠くまで運べてしまう。

普通の間人はうらやましく思ったが、頼りにした。

しかし、頭は以前より少し悪くなってしまったため、センスもなくなってしまった。

彼らは、技術面で別の人間の力を借りることとなった。

その一ヵ月後、今度は別の街二つの上空を、青い空がおおった。

空からは、青い粉が振ってきた。

やはり人々は驚き、逃げるものもいたが、赤い粉が降ってきた町での情報を知っていたものは、自分も外に出て、粉を浴びることにした。

粉は三日間降り続くと、やはり何事も無かったかのように消えた。

粉を浴びた人間どうなったか？

黒髪の間人も、栗色の髪の間人も、金の髪の間人も、全て青い髪になった。

当然目の色も、青になった。

だが彼らは強靱肉体にはならなかった。

変わりに、凄まじいジャンプ力と聡明さ、そして美を得た。

今まで悩んでいたものは全て彼らによって解決され、今まで上ってとらなければならなかった木の実なども、そのジャンプ力によって問題も無くなった。

何より、美術的に優れ、そのセンスはどの民族よりも特徴があり、秀でていた。

だが、以前よりずっと非力になり、体力もなくなってしまったので、赤い髪の間人に頼ることがままあるという。

さらにその一ヵ月後、別の街には黄色い粉が降り注いだ。

その頃にはすでに、赤い粉と青い粉の噂は広まっていたので、皆はその粉を浴びることにした。

粉は三日間降り続くと、やはり何事も無かったかのように消えた。

粉を浴びた人間どうなったか？

黒髪の間人も、栗色の髪の間人も、全て美しい金の髪になった。

当然目の色も、金になった。

彼らは、自然との対話が出来るようになり、それによって優しい心をもった。

そして、何よりも勉学を好むものとなり、特別技術力に優れ、錬金術が発達した。

そして自然、動物たちとの対話により、彼らは精霊使いと呼ばれるようになった。

だが、赤い髪の間人のように怪力でもなければ、強靱でもない。

青い髪の間人の様に、美しくセンスも無い。

たびたび、彼らは青い髪の間人と赤い髪の間人を頼るようになった。

さらに一ヵ月後、今度は離島の別の街を、白い雲が覆った。

それはそれはとても美しい白い雲で、皆自然と外に出た。

すると、白い粉が振ってきた。皆は雪みたいだと喜んで、それを浴びた。

粉は三日間降り続くと、やはり何事も無かったかのように消えた。

粉を浴びた人間どうなったか？

黒髪の間人も、栗色の髪の間人も、金の髪の間人も、全て美しい銀の髪になった。

当然目の色も、薄い黒色になった。

粉を浴びた人間は、不思議とさわやかな気分になり、空を飛べるようになった。

彼らはその自由に飛べることを生かし、空の定期便をはじめることにした。

離島からはなれ、大きな街へ売り買いしに行くことも出来るようになった。

だが、夜に弱くなり、足も弱まり、下半身の体力が無くなってしまったため、たびたび別の人間の力を借りることとなった。

そうして四ヶ月が全てが変わってしまった世界だが、では粉を浴びていない人間はどうなったか？

特に秀でた能力は持っていないものの、粉を浴びた人間の力になったり助けられたり、そして農業をし、独自で暮らしていった。

彼らは彼らにしかできないものがあるようだった。

仲は悪くないようだ。

終

駄菓子屋といじめっ子

「隆、お前いじめっ子なんだって!？」

父親のどなり声がリビングに響き、母親は呼び出されて現在家にいない。

「弱い者いじめして何が悪いんだよ、そういうやつをいじめるのも楽しいし」

隆は小学六年生、一人が悪さをすれば連鎖反応を起こす。面白半分に牛乳をぶっかけたり、ごみを机に入れたりもしていた。

当然先生に言われるが、隆は懲りていなかった。

すぐにべーっと舌を出すと、自転車に乗りこんで、町内を一周することにした。

母親がそのうち帰ってくる。

今は夕方、陽が沈むまで存分に走っていよう。

三十分ほど走っていて、何かおかしいことに気付いた。一度迷路のようなアパート群に迷い込んで出た後に、すぐに異和感にあたりを見回す。

ここは住宅街、高いマンションが多いはずの中で、なぜか周りは一階建ての見たことのない家、古臭いアパート、駄菓子屋があった。

財布を持って来てので、喉を潤すために駄菓子屋に入れば、同い年くらいの男の子が三人ほどいた。

一人は、びくびくしながら他の二人の様子をうかがっていて、他二人はそれをにやにやしなから見ている。

(なーんだいじめじゃん。、とーちゃんほら、俺以外にもやってるやついるって)

あれを買え、これを買えとうるさく、少年はそれに従っていた。

そのうち隆は見たことのないジュースを手に取り、千円札を取り出して買おうとして止められた。

しわがれた声は、店の主、何度も千円札を眺めては、首をかしげた。

「あんたこのお札偽物かおもちゃかい？」

「はあ？」

なら今度は五千円札はどうだ、と出せばこれも駄目。じゃあ新五百円玉、これも駄目。

仕方なく百円玉を取り出してそれを渡した。

百円玉をまじまじと見ながら、店の主は少し笑った。

「おかしいこともあるもんだ、『昭和六十年』と書いてあるよ。でも本物だね」

何がおかしいのかわからない。今は二千十一年、そこにそのくらいのコインが出てきて貸しいと思うこと時代がおかしい。

素直にジュースを受け取ると、一気に飲んだ。

そういえば、商品も古臭いのばかり。こんなジュースも初めて見たし、周りを見たことがあるようでない。

ずっとこの町に住み続けているが、こんなところに駄菓子屋なんてあったらだろうか。

(高いマンションないし、あの駅前のデパートも…。小学校が近くはない)

どこか変な所に迷い込んだのだけはわかった。

自転車に乗って帰ろうとしたところで、例の少年が目についた。今度はけられている。

そういえば、自分も、学校ではそんなことをしていた。

だが客観的にみると、なんと格好の悪いこと。

ただの馬鹿が力の強いように見せているだけに思えた。

「…おい」

隆は自転車から降りて、いじめられている子に手を差し伸べる。

ほかの二人はあからさまに不機嫌になって、今度は隆を標的にしだした。

「見たことない顔だけど、何か用かよ！」

「俺もいじめっ子、だった。けどお前らカッコわりいー、どうせいじめることでしか自分を強く見せらんないんだろ？いじめ、カッコ悪いって本当だな」

昨日の自分もきっと周りにこんなふうに見られていたのだろうか。

「いじめ、カッコ悪いって何？」

ふたりは顔を見合わせたが、有名なフレーズなのに知らないらしい。

何にせよ、アホが二人、カッコ悪いと言われて隆には手を出すことはなかった。

手を差し伸べた相手は、所々にあざを作っていた。

どこかで見たことがあるような？そんな顔だったが、友人で思い当たる節はなく、彼は立ちあがってお礼を言うと、すぐに逃げ出した。

「いじめ、カッコ悪い、かー」

と、とたん脇腹に一発鉄拳が入った。

調子に乗った二人が隆を今度こそ殴りに来たのだ。店の主は突如始まった喧嘩に慌てて出てくる。

隆だっていじめっ子、いじめられているわけではなく、相手を全力で殴りにかかった。

ついには店の主に止められ、空も暗くなってきたので退散することにした。

顔にあざができてしまった。

それからやはり一周すると、今度は元の場所に戻り、いくら探してもあの駄菓子屋には戻れなかった。

周りに見えるのも高いマンションやビル。

いったい何があってあんなったのか、よくわからない。

戻ってくると、母親が顔を真っ赤にして隆を出迎えた。

「この馬鹿!!」

叩かれるかと思ったが、母親が、隆の顔にあざがあるのに気付いて手を止めた。

「どうしたの、これ」

「あ、あー、駄菓子屋でいじめられっ子いたら助けたら他のやつらに殴られた。いじめっ子、俺気付いたけど、はたから見るとダサいだけなのな」

あのいじめられっ子は元気になっているだろうか。明日になったらまたいじめられていないだろうか。

そして一週間がたち、隆はいじめっ子にならなくなった。

自然と周りも普通に接するようになり、なんだ、ただ遊んでいただけかと思った。

「隆、最近はおとなしいんだって？」

父親が、先生からの便りを耳にして、上機嫌で隆に問いかけた。

「だから、いじめなんてかっこ悪いだけだって気付いただけだって」

そうだ、そういえばこのあたりに駄菓子屋があることを聞かなくては。

「なあ、この辺りって駄菓子屋あった？この前見つけたんだけど」

父親は、脳内マップを広げるが、子供の行ける距離で駄菓子屋がないことに気付いた。

「ないない、ないなあ。どこまで遠くまで行ったんだ？駄菓子屋といえば父さん嫌な思い出があってなあ...」

「嫌な思い出？」

「三十年くらい前か、この先のところに駄菓子屋があったんだ。今ではもうないけど。父さんよくいじめられて、無理やり菓子買わせられて、逆らったらけられてたんだよ。ああ、でもヒーローがいるってもんでさ、顔はあまり覚えてないけど、隆に似た子が助けてくれたんだ。そのあと木の陰から見てたらすごい大喧嘩して...」

いじめられっ子だったなんて初めて聞いた。

だが聞けば聞くほどデジャヴュを覚えた。

「当時は自転車なんて高価な者だったのに、それに乗った男の子だったな。それだけはよく覚えてる。それでその次の日から勇気出して抵抗したらあっさりいじめられなくなったよ。だからあの子には感謝だな。いま何してるかな」

「三十年...」

「いじめかっこ悪いだっけな、今では有名なセリフを言ってたよ」
なるほどね。

自分は過去に迷い込んだわけだ。

隆は千円札も五千円札も使えなかったわけがようやくわかった。

部屋に戻ると、ベッドの上で腕を組んで座る。

あの駄菓子屋がすべてを変えたということに、ようやく気付いた。

終